

【特集：葛藤するマレーシアの教育——国民統合とグローバルな競争】

特集にあたって

久志本裕子・杉村美紀・鴨川明子

マレーシアは、マレー人、華人、インド人を主要グループとする「民族」の枠組みが重要な意味をもつ「多民族国家」であり、そうした「民族」の枠で分けられた人々をいかに「国民」として統合するかが、1957年の独立以来一貫して教育における重要な課題とされてきた。一方で、特に1990年代以降にはグローバル化に伴う国際社会の変化への対応と、経済的な競争の激化に対する戦略も、教育政策における重要な課題になっている。これらの2つの教育上の重要課題は矛盾をはらんでおり、政策の次元でも、人々の選択の次元でも、様々な葛藤が見られる。

折しもマレーシアでは2022年11月に総選挙が行われ、新政権が誕生した。本特集は、新政権誕生後間もない2023年1月22日に行われた、日本マレーシア学会第31回研究大会シンポジウム「葛藤するマレーシアの教育——国民統合とグローバルな競争」をもとに組まれたものである。本特集は、シンポジウムの登壇者と企画者による論文から構成される。

本特集では、政治や経済及び社会変容のなかでマレーシアの就学前・初等・中等教育と高等教育において国民統合とグローバルな競争の相異なる2つのベクトルがどのように交差し、どのような葛藤が見られるのかを論じている。各論の概要は以下の通りである。

まず、畝川憲之による論文「マレーシア国民統合へ向けての教育の課題と可能性」は、独立以降の初等・中等教育制度の変容を概観することから始まる。特に、民族別・言語別に分かれており、民族アイデンティティを形成し強化する機能を持つ初等教育制度に着目し、その制度の変容が中等教育における民族間関係に影響を及ぼし、学校内民族分離を生じさせているとする。そして、現行の教育制度の中で民族間関係をどのように改善することができるかという独自の問題設定をした上で、国民戦線（Barisan Nasional: BN）政権が推進してきた、教育現場における民族交流政策（主に Rancangan Integrasi Murid Untuk Parnpaduan: RIMUP / Student Integration Plan for Unity）の効果を実証的に検討し、課題を明らかにしている。

畝川が描く国内の民族と国民統合の関係をめぐる葛藤の一方で、グローバル化や国際化を積極的に推進する中で国民統合との間に生じる葛藤もある。杉村美紀による論文「マレーシアの教育政策におけるグローバル・シティズンシップの育成と課題」は、まさにそうしたマレーシアらしい葛藤の新たな局面を描いている。まず、「マレー人の言語や宗教

を軸とした教育システムによって、教育を通じた国民統合が展開されてきた」マレーシアにあって、外国人労働者の流入や留学生移動などの人の国際移動が活発化してきたことにより、国民統合の過程で重視されてきた従来の「国民」概念にはおさまらなくなってきた現状を描いている。その上で、国際的な動向を反映し、SDGs (Sustainable Development Goals) の中で取り上げられるグローバル・シティズンシップの育成が、就学前教育から高等教育までの教育施策にどのように位置づけられているかを、グローバル化のもとで「重層化する「複合社会」とそこで生じる多文化共生問題という観点から」考察している。

久志本・鴨川によるレビュー論文では、本特集の前提となるマレーシアの教育制度を説明したうえで、マレーシア研究に携わる研究者のみならず、様々な目的で「マレーシアの教育」について知ろうと文献や論文を探している人々にぜひ手に取ってもらいたいと考える文献や論文を、ブックガイド的ないしはカタログ的に紹介している。マレーシアの教育に関する研究は英語やマレー語等を含めば膨大な量になり、分野も多岐にわたるが、今回のレビューでは、日本語で読むことができる文献を主たるレビューの対象とすることで、「教育研究」と「マレーシア研究」の双方を含み、これまでの研究の積み重ねを整理することを目指した。マレーシアの教育の歴史的展開に沿う形で、多分野にまたがる研究から、できるだけ多くの文献や論文を紹介するよう努めている。本特集の前提となるマレーシアの教育の歴史と現状をまず確認したいという方は、このレビュー論文を読んでから各論をお読みいただくと、より理解しやすいかと思われる。

以上の各論を合わせて見ると、マレーシアの教育政策の柱として掲げられてきた「国民統合」という目標が、国内の多様性との関係において従来抱えてきた葛藤に加えて、教育をめぐるグローバルな状況の変化への対応という新たな方向性との間にも葛藤を抱えるようになってきた状況が見えてくる。本特集がこの両者の合わさるところにマレーシアの教育の新たな特徴を読みといていく一助となれば幸いである。